

第六〇回「大会」のお知らせ

日時 二〇二一年五月二十九日(土)
十四時～十五時

会場

WEB会議システムZoomを使用した
オンラインで行います。

大会概要

- ・会長挨拶
- ・二〇二〇年度事業報告及び各部報告
- ・二〇二〇年度会計報告・監事報告
- ・役員改選・承認
- ・二〇二一年度事業計画・予算審議
- ・その他

申し込み

例年同時開催しております「学縁のつどい」に関しては、新型コロナウイルス感染状況をふまえた時期を改めて催したいと考えております。ご了承ください。

同封のハガキ、またはハガキに記載されているQRコードからインターネットで、五月十六日(日)までにお申し込みください。いただきましたメールアドレス宛にZoomに参加するためのURLをお送りいたします。「どこからでも」ご参加いただけますので、この機会にぜひ皆さまのご参加をお待ちしております。

女書

— 第78号 —

〒112-8681
東京都文京区目白台2-8-1
日本女子大学教育学科の会
電話 03(5981)7500
ホームページ
<http://jwu-gakuen.net/>
メールアドレス
info@jwu-gakuen.net

「教育学科の会第六十回大会」のご案内

会長 井上 信子

今年も大会のご案内をお知らせする時期となり、例年にならい、大会の準備を進めつつ、お声がけをさせていただき予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染拡大が収まる様子が無く、教育学科の会の執行部内での話し合いの結果、今年度の大会は、オンラインにて実施の運びとさせていただくことにいたしました。オンラインでの大会ならではの趣向を凝らし、多くの皆様のご参加をお待ちしております。どうぞ、奮ってご参加ください。

本年4月、教育学科は、31年過ぎて参りました西生田キャンパスを離れ、目白キャンパスへと戻ります。引っ越しの余波などを考慮し、「学縁のつどい」は、別途設定のうえ、改めてご案内を差し上げたいと存じます。ご理解賜りますようお願い申し上げます。

この新型コロナウイルス禍においても、学生委員の積極的な活動には、目を見張るものがあり、大変頼もしく喜ばしいことでございます。引き続き、教育学科の会にご支援賜りますようお願い申し上げます。

提言

「卒業生との明日に架ける橋」

教育学科教授
日本女子大学教職教育開発センター所長

田部 俊充

2020年12月13日に開催された日本地理教育学会12月例会は、「農業・農村と地域学習」というテーマでした。共同発表として、田部ゼミに所属していた神奈川県小学校的勤務する鎮西真裕美さんに、2019年度に行った農業体験学習についての実践報告をしてもらいました。また、その実践に刺激を受け、「持続可能な社会を考える視点を養う授業づくり」というテーマで卒論に取り組んだ小野加菜美さん(4年)に、農業体験学習をESD的な実践へと再構築を図るチェックシート・アプローチなどを提案してもらいました。

鎮西さんは「小学校第3学年社会科「農家の仕事」に関する実践報告」として、撮影した写真を中心に、全10時間の授業を中心に報告してくれました。新型コロナウイルスの感染拡大でオンラインでの学習の必要性は高まっていますが、体験学習の大切さ、特に本物の「人」とふれあう大切さについて論じていただき、それを再確認するとともに、中学校、高等学校の先生方や地理学者など多様な専門家の方とも意見交換をする機会となりました。卒業生との交流は私にとってもとても有意義でした。コロナ禍で心がめげそうになったとき、思い浮かんだのは大好きなサイモン&ガーファングルの『明日に架ける橋』の冒頭の一節です。

ひどく疲れ 自分が小さくなってしまったと感じるとき そんな時でも
あなたが目に一杯涙を貯めているときには
私があるあなたの涙を全部乾かしてあげよう 私はあなたの味方だ

今回のように卒業生のみならずとともに研究に取り組み、少しでも明日に向かって橋が架けられたら嬉しいです。

最後に、2020年8月には講義の紹介動画を撮影していただく機会がありました。タイトルは「世界の楽しい地理授業づくり」ポストン、中国・深圳、スウェーデンが登場します。大学院生の木村早紀子さんにも出演していただき、18分57秒の大作を仕上げました。機会があったら是非ご覧になって下さいね。

動画で見る知る日本女子大学 模擬講義／教育学科 田部俊充教授
2020年8月

https://univ.jwu.ac.jp/univ/admission/exam/woc_mocklesson.html

学生委員会より

1年生の不安を解決したい
〜コロナ禍における学生委員の活動について〜

1 挨拶

今年度教育学科の会・学生委員長を務めております、教育学科3年の稲田妃桃と申します。4月に現3年生を中心とした新体制でスタートした学生委員会でしたが、今年は新型コロナウイルスの影響により予定されていた活動のほとんどが中止になり、まだ活動をしているという実感が正直ありません。そんな中、私たちは逆にこのコロナ禍で「今できることは何か」ということを考え、学生委員会の活動を支えて下さる先生方のご協力も賜りながら、主に学生を主体として8月頃からある活動を始めました。今回は、その活動についてお話しさせて頂きたいと思います。

2 活動に至るまでの契機について

発端は2020年8月8日(土)に行われた理事会での井上先生からのご提案でした。コロナ禍で今年度授業は全てオンライン授業になり、私自身も慌てて自宅のネット環境の整備を行い、4月5月は混乱していたのをよく覚えております。私は、大学生活Ⅱキャンパスで過ごすものというイメージがとても強く、特に今年はずミも始まる年でしたので同

じく教職を志す友人たちと切磋琢磨しながら学べることを楽しみにして

いました。そんな大学生活をよく分かっている私たちでさえ、オンライン授業というものになかなか慣れず一人で黙々と大量の課題と闘っている日々でした。私ですら辛い思いをした前期、憧れのキャンパスライフに期待を抱いていた大学1年生は、この状況になりどんなことを思っただけの授業を終えたのでしょうか？彼女たちは入学してから一度も西生田キャンパスに足を運んでいない。誰が同じ授業を受けているのか分からないから悩みを相談することもできない。常に不安な気持ちで授業を受けたら課題を一人で行なったりという状況が続いてきたと思われま

め、企画運営をするに至りました。学生委員会全体の「1年生を助けたい。寄り添いたい」という気持ちがある今回の活動を行う契機に繋がったと感じております。

3 企画運営に向けて
〜学年を超えた企画会議から〜

交流会の具体的な開催方法や、1年生の不安をどう解決していくかという話を話し合うために1年生から3年生までの学年を超えた計12名の学生委員がオンライン上で集まり、井上先生・五十嵐先生と共に企画会議を行いました。「1年生の大学生活への不安を解決するにはどうすればよいか」を中心議題とし、まずは1年生以外の学生にも今思っていることやオンライン授業等で不満に感じていることなどを正直にいくつかあげてもらいました。オンライン授業は今まで誰もやったことのない経験であり、授業に対して悩みを持っているのは1年生だけとは限りません。この企画会議を通して学生委員の

比べて明らかに授業が受けやすくなったと私自身も感じております。他者と交流することが難しい今、オンラインというものを多様に活用しながらいろんな人と話をしたり意見を交わしたりすることの大切さを実感いたしました。特に今回のような企画会議では他学年交流が一つのポイントになっていと思っています。1年生にとっても2・3年生が同じような悩みを持っていたこと、それを解決するためにどのようなことをしているかアドバイスをもらえたことは大きな励みになったのではないのでしょうか。初めての試みでしたが、その効果はとても大きいと思います。実は多くの学生が他学年や他学科との交流を望んでいます。ぜひ大学全体でも気軽に学生同士の交流ができる機会を検討して頂きたいです。

話が少しそれてしまいましたが、ここからが本題です。これらの話し合いを経てそこから大学・教員・先輩それぞれにできることは何か、何をどう改善すればよいかということをお話し合いました。その結果、当初は学生の声を集めるツールとして誰もが気軽にアクセスし、質疑応答などもできる教育学科独自の情報掲載サイトを開設する方針でしたが、サイトの運営関係で諸々難しい問題が出てきたため、多くの学生が日常的に利用している「Instagram」で情報を発信していくことになりました。今すぐにも情報が欲しいという意見から、既存のSNSを使って多方

面から履修や大学生活に関する先輩たちの情報を集め、1年生の不安を解消するための対応策として設置しました。掲載内容は、サークル・教員採用試験・授業内容や授業の教員情報など1年生に有益なものを中心にし、授業における課題や展開科目の情報なども載せることにしました。それは教員の目に触れることはなく、「主に1年生、そして教育学科の学生のための場」として設け、いろんな体験をしてきた先輩たちの生の声と本音が出せるようにしました。

4 Instagramとオンライン後期履修相談会の報告

企画会議終了直後に、学生委員でInstagramアカウントを作成しました。主に本学学生に対して、「学生による学生のための情報提供の場」として運営を行いました。アカウントのストーリー等を使ってフォロワーに質問に答えてもらい、回答結果を投稿して載せることで1年生に大学生活の様々な情報を発信しました。開設から5日ほどで80名ほどのフォロワーが集まり、学生ならどこの視点で詳細な情報を提供することができたように感じました。

オンライン後期履修相談会は、直前まで開催に踏み切るか迷いましたが、Instagramでのアンケートで参加したいとの声を受けたため、急遽手伝ってくる学生委員を招集し、私が責任者となって開催をしました。8月31日19時から始まった相

談会は、1年生が15名ほど参加してくれました。相談内容は教育学科ならではの悩みが多く聞かれ、教員免許取得への不安やそもそも教員になるかどうか迷っている、複数の免許を取得することのメリットなど多岐にわたる内容でした。3名の学生委員と時々五十嵐先生が相談を聞いてアドバイスをしたり、今抱えている不安を解決するための手立てを考えたりするという形で相談会は進んでいきました。長時間参加してくれた学生もおり、彼女たちにとっても有意義な時間になったのではないかと

思うと同時に、これからも何らかの形でこのような機会をつくり継続して行なっていくことで、今後ももっと1年生に寄り添っていけるのではないかと感じました。参加した1年生が、少しでも後期の授業をほっとした気持ちで受けられていたらと思います。1年生の相談を聞きながら私自身も今までの経験を振り返ることができ、一つひとつの相談内容に対して私なりに思うことやアドバイスを1年生に伝えることができました。相談を聞いていて気になったことは、「同じ免許の子としか仲良くなれないのではないか?」と教育学科にありがちな悩みを相談してくれた学生がいたことでした。オンライン授業の中で、友人関係について多くの1年生が気にしているように感じました。やはり友人に限らず、先輩や教員などオンラインでの交流をもっと増やすことが後期の課題でもあるの

かなと感じました。また、機会があればこのような会を設けることを前向きに検討したいと思います。

5 おわりに

以上が、私たち学生委員会が今年の8月頃から後期授業開始時期に向けて行なってきた活動の詳細になります。Instagramや相談会の運営に携わった学生委員のスタッフだけでなく、情報提供に協力してくださった教育学科の多くの学生にもこの場をお借りしてお礼を申し上げます。と思います。同じく「1年生のために」という思いを持ち、活動に参加してくださり本当にありがとうございました。また、学生委員会担当の先生方、ご支援くださいました教育学科の会の皆様にも重ねてお礼申し上げます。私たちに事態の収束が見えない予測不可能な日々ではありますが、その中でも充実した大学生活を送ることができるよう、これからも学生たちの声を拾っていきながら新しい企画やアイデアを発信していきたいと思っております。もちろん学生の皆様からの意見等もお待ちしております。今後とも学生委員会をどうぞ宜しくお願致します。



【報告】

桃・柿育英会への寄付について

2011年3月11日の東日本大震災から10年が経ちました。当時、教育学科の会として「被災した子どもたちに何かできることはないか」と理事会、回生委員会で検討し、桃・柿育英会東日本大震災遺児育英資金に協力することにいたしました。

以来10年間、会として毎年2万円の寄付を続けてまいりました。10年を経て桃・柿育英会に寄せられた寄付金の総額は52億円を超え、被災した三県(岩手県・宮城県・福島県)の遺児・孤児1880名に奨学金として届けられました。尚、寄付金の受付は終了しましたが、子どもたちへの支給は引き続き行われます。

桃・柿育英会の名前は、果樹の木が育つのをじっくりと待つように、震災で保護者を失った子どもたちを少なくとも10年間は見守っていききたいという思いから生まれたこととです。私たちもその思いに賛同して支援を続けてまいりました。会員の皆様のご協力に感謝いたします。

【副会長 26回生 大森桃子】

懇話会の報告

コロナ禍がまだまだ地球全体を覆っている2020年12月5日(土)に教育学科の会、恒例の懇話会が開催されました。今回はZoomシステムを使っただけのリモート懇話会、自宅からも参加可能な新しい生活様式での懇話会、遠方からのご参加もありました。パソコン画面を共有しての教育学科・清水睦美教授による『コロナ禍での学校を考える』は最新の情報を知る事のできた学びの多い内容で、参加者は沢山の刺激を頂く事ができました。

【報告 文化部 中込知野】

ご講話の前提条件としての一斉休校措置についてのメモ(桜楓新報への清水先生掲載原稿より抜粋)

2020年2月27日午後6時、安倍元首相の記者会見で発表されたのが、3月2日(月)からの一斉休校です。27日(木)の業務終了後の時間に発表されたこの措置は、教師にとって大きな「無力感」を与えました。なぜなら、残されたのは翌28日(金)で、その時間では何の準備もケアも行うことができないまま日本全国の一斉休校となってしまったからです。

生徒と学校で接することができなくなった教師たちは学校再開を待ちつつ、家庭に電話をかけたたり、ディスタンスを取りながらの家庭訪問を行ったりと、迷いながら対応を工夫していました。学校や教師の主体性を奪ったこの施策は、学校、教師、生徒のすべてに与えた影響はとて大きいものでした。

『コロナ禍での学校を考える』
一斉休校・学校再開と教育格差の関連を考える

教育学科教授 清水睦美先生

◆一斉休校直前の学校・家庭・子どもの姿

——コロナ禍直前の学校の機能

一斉休校の意味を考える時、近代教育の機能を考えることが重要だと考えます。近代以前は身分社会であり、子どもは親の身分や環境をなぞって再生産されていたわけですが、近代以降は、身分社会から個人を切り離すため、学校は業績主義社会の実践の場となりました。いわば社会の流動性を高める機能、身分や社会的地位をシャッフルできるのが、学校制度であると考えられてきたわけですが。

ところが1960年代後半頃から欧米を中心とした教育学研究の成果(コルマン、ブルデュー、ブラウン)として発表されたのは「親の文化資本は学校で再生産される」「学校の力は家庭の力を上回ることはできない」という真実でした。時おかれて日本の教育界でも2000年代には「ペアレントクラシー」概念への注目が集まります。特に2018年に公表されたベネッセ教育研究所と朝日新聞とが共同で行った学校教育に対する保護者の意識調査では、「親の教育力で子どもの将来はほぼ決まってしまうのは仕方ないこと」を容認する動きがより顕著になってきていることが示されました。更にクロス集計を行うと、経済的に「ゆとりがある」とする層での格差容認する回答が多いことも示されました。

このように、いま、日本の学校教育を考える上では、階層による家族間格差が前提となります。ただし、この格差に対して、「格差は当然」「格差は避けられない」という考え方と、「部分的にも下に手厚くすることで、学校も再分配機能をもとう」

◆突然の一斉休校が学校に与えた影響

——「突然」であることの問題性

という考え方で対立しており、どちらの考え方で教育施策を進め、教育実践を行っていくか、教育行政の中でも、教師間でも、あるいは一人の教師の中でも、両者がせめぎあっていたということ、コロナ禍直前の学校の姿としてまずは確認しておきたいと思います。

混乱が未だ継続しているコロナ禍ですが、一斉休校が「突然」であったことの問題性を考えてみたいと思います。先前提条件にもありましたように教師にとっては衝撃的な通達であった一斉休校ですが、「突然」ということが、私たちの生活に何をもたらすのかを分析してみます。

私は3・11の被災地である陸前高田にボランティアとそれに続く研究活動で通ってきました。3・11以後の学校の休校とそれに続く混乱も「突然」の地震によってもたらされましたから、震災とコロナは「災害」という枠組みで考えれば似ていて、両者を比較して「突然」の意味を考えると、見えてくることがあるように思います。

震災の場合の「突然」は、「突然」であるものの、三陸海岸という地域がみな経験したという地域的共通体験があり、かつ、そこには「ご先祖様からの伝承」で津波による被災体験が語られ、歴史的な了解事項もありました。また3・11の被災地は大規模であったものの限定された地域であり、非被災地から被災地へと流れるべき資源の方向性も明確でした。このように3・11という災害も「突然」で

はあったのですが、起こる可能性が高いこと、資源の流れる方向が明確であることから、3・11をめぐる対応の必然性は共有できやすかったと思います。

かたや、コロナの場合はどうでしょうか?メディアを通してコロナ対応に懸命であるとされる政治家がそもそもマスクすらしていないかった2月。過去から学んだ知恵もなく、日本全国があまねく被害にあっているとメディアは喧伝するが実感もない。にも拘わらずの休校措置だったのです。学校では長期休暇が年に数回ありますが、その前には必ず教師から子どもへの心構えや休みの過ごし方が提示されるものです。そうした内容を親も共有しています。突然でなければ教師が行えたケアがあったはずなのです。このようにコロナの「突然」は、震災のそれと比較しても、必然性が共有できにくく、その不確かさが際立った措置であったと結論づけられると思います。政治学者の岡野八代さん(同志社大学)は、この休校措置を「女・子どもへの命令」だだつたと分析していますが、そこにつながっていくと思います。

そもそも学校は子どもにとっては社会そのものです。社会構成員としての自分があり、その中で学習があるのです。勉強さえしていればよいわけではありません。休校とは子どもにとって重要な自立的な社会空間が喪失することでもあったのです。ちょうど反抗期の子どもは親との関係性はよくなく、親以外に逃げ道のない家庭に閉じ込められるのは大変なストレスでした。リモートワークで親も家庭において心理的な摩擦が大きくなり精神的なバランスを崩した子どももいました。さらに、冒頭でお話ししたような階層による家庭の格差があることが前提ですから、子どもにとって教育的な環境が必ずしも提供されていないケースもあるわけで、そうした子どもにケアの手はなかなか及びません。母子家庭の場合は経済的

に逼迫し、家で勉強をさせる余裕すらないケースもありました。当然ながら親もストレスが溜まり、子どもへの虐待も増えました。「突然」のケアの準備がされない一斉休校のもとでは、先生に相談するチャンスは本当に限られたものになってしまっていたのです。

そのような中、政治家からのメッセージは現実とは遠いものばかりでした。「9月入学」は、ケアされない子どもたちをさらに長く家庭に留め置くわけで、一層格差が開いたところから学校が再開されれば、階層による家庭の格差はさらに広がります。また、一斉休校のもとで注目されたICT活用ですが、「GIGAスクール構想」などはIT業界の商機にこそなれ、その対象となる子どもは全く無視されています。ICTを推進するには家庭でのインフラが整っていない現実では実現できませんから、準備不足では格差を助長する結果になるだけです。

そのような中ではありましたが、ひとすじの光となったのは、休校から再開への段階的な措置の中で行われた分散登校が、少人数学級の実践の場になったという成果です。子どもにとっても大きな試験の期間であった休校期間、何を経験したのか？ 何を頑張ったのか？ 大変だったのは何か？ 何をしたかったのか？ などが少人数の場だったからこそ、問うことができたと思います。このような「問われること」は、子どもたちの自律性を回復するために重要であると同時に、子どもどうしで経験を共有することが出来ます。そして、それこそが学びの土台だと私は考えています。ただし、問題は、そうした時間は長く続かず、コロナ禍という状況が続いているにもかかわらず、いつのまにか「遅れた分を取り戻せ」「教科書を終わらせなければならぬ」といった教育内容を詰め込むスタイルへと戻ってしまったことだと思います。

◆教育の不等と今後の学校の役割を考える
階層間格差を前提とする学校教育のもとで

コロナ禍で起きた突然の一斉休校とその問題性、さらに、学校再開時の分散登校による少人数学級で体感した子どもたちの学びの土台作り。このような経験を、私たちは、今後の学校教育に活かしていくことはできないのでしょうか。それを活用することで、教育の不等等を少しでも是正する方向に向けられないのでしょうか？

教育学者の本田由紀さん(東京大学)は、学校の学びについて「レリバンズ」(関連性、意義、有意味性)という概念を使って、教育内容の必要性を説明する責任が大人にはあるということを主張しています。なかでも重要だとしているのが、市民的・職業的・即時的という3つのレリバンズです。「市民的レリバンズ」は、大人になるためにどの子どもも、共通に知っている必要がある内容。「職業的レリバンズ」は、将来に就業するために必要になってくる内容。「即時的レリバンズ」は、学んでみその時に面白い、楽しいと思える内容、となります。これにならえば、「今学んでいる内容に、なんの意味があるの？」という子どもの問いに大人は答えなければならず、子どもはその答えに答しながら学習を進めていくこととなります。私は、このような形で学習内容を選び取られることは大変重要であると考えています。私には、このように存在することに必要であるという事です。イメージは、学校再開の分散登校時に実現した「少人数学級」です。

現在の日本の学校は大人数を前提にして組み立てられています。大人数であるがゆえに、教室は序列的で競争的であり、そこに適合できない子どもは外に押し出

されます。そのための受け皿として適応指導教室や国際教室、特別支援学級等が設置されています。この方針下での教師の役割は、大人数の教室運営が優先されるため、どの子を排除して外に出すかを選別する役目を負うことになってしまいます。皆と同じことができない子どもは、教室から外に出して個別対応することが良いことだとされ、排除された子どもがいなくなった教室には同調圧力が一層強く働くようになります。さらに、こうした学級でやり抜いていくことが必要だと考える親たちは子どもの教育に強い関心をよせますが、他方で子どもの教育にこだわり切りに成れない親との差はひらいていきます。階層による家族間格差の広がり、こうした仕組みとも連動しているのです。

それと比較すると、少人数学級は人数が少ないという条件により、排除がされにくくなり、それにより包摂という基準が前面に出てくることとなります。なぜなら、大人数の時にはケアできなかった部分にケアが届くようになるからです。それにより、学級の中には多様性が生まれるようになります。もちろん、たとえ少人数でも特別なニーズのある子どもはいますが、人数が少ないことにより、大人数では排除されていたけれども同じ教室で皆と共に学ぶ、という教室の在りかたに変化していきます。サポートを受ける子どももあれば、サポートをする子どももいる教室は、お互いに刺激や学びを得ることが出来ます。教室や学校は多様性の実践の場として機能し、さらにつけ加えれば、多様性を尊重する民主的な社会づくりに貢献できる人の育成へともつながっていきます。いじめの問題など、大人数の子どもたちを同じ基準で整理させる全体主義的な教育はすでに限界がきていると誰しも感じており、制度の改善が必要です。政治的財政的な観点からなかなか大きく舵を切ることができてい

いの現状ではありますが、未来にどのような教育制度を残していくのかということを考えれば、コロナ禍で見えた光を大切に、一歩でも前に進めていきたいと考えています。

◆清水先生よりの後日談

少人数学級化への動きは、文科省と財務省の予算折衝へと持ち込まれ、12月17日に小学校全学年で学級の上限人数を35人まで引き下げることで決着しました。義務標準法の複数学年での引き下げは昭和55年以来ということですから40年ぶりの改正です。大きな成果があったと総括したいところですが、小学校のみの改正で中学校が対象にならなかったこと、各都道府県の教員採用段階での定数崩しによる教員の非正規化問題、さらには世界レベルでは35人学級はクラスサイズとしてまだまだ大きいことなど、豊かな学びの場を作り出すために乗り越えなければならぬハードルはいくつもあろうかと思えます。

小学校での全学年での35人学級の実現を一つの成果としつつ、その先の豊かな教育環境が整う未来に向けて歩みを止めずに取り組んでいきたいと思えます。

参加者の感想



●私にとっては、貴重な初Zoom体験でした。昨年まで、微力ながらですが、いろいろな立場から小学生の教育に関わってきました。退職後、このようなコロナ禍がやってきて、学校内や子供たちの現状や今後の姿が、日々気になっておりました。清水先生のお話は、丁寧な資料を元に、とても分かりやすかったです。私も少人数学級化に共感、賛同します。このコロナ禍をきっかけに、教育現場の実態を見つめ直して、活動が進んでいくことを願っています。どんな時代や

社会であっても、子どもたちの笑顔は社会の宝だと思います。ピンチをチャンスに、何事も前向きに捉えて、大人の私たちができることをコツコツとやっていると、私も刺激を受けました。また、現場で頑張っている富田さんはじめ、現在勉強中にある学生さんたちなど、若い方々の活躍も陰ながら応援しています。

【角能由美子 (31回生)】

●昨日のご講演では、現実の学校で起きていること、特にこの1年のコロナ禍の中で、まさに「突然の」状況下で学校関係者が経験している様々なことを想像することができました。貴重なお時間に長すぎる発言をさせていただきました。申し訳なく反省致しました。私自身、競争による集団の中で、児童生徒であった時代も、教壇に立つてから、排除される側に立つて行動してこられたかと言え、そうではなかったと思われ返されます。多様な状況にある子ども達のニーズを満たす包摂性のある教室は、

きつと他者と共に豊かに生きる心と知恵とを育むことでしょう。スペシャルニーズを持たない子は、いないのではないかしら？教員が1人ひとりに向き合える環境を整え、包摂を基準とする学びの空間を実現するには、まずは少人数学級の実現が必須だと思います。そしてそんな環境と共に、包摂性を担える教員の人間観、教育観、力量とそれを支える仕組みが必要だと思います。もう少し若ければ、再チャレンジしたかったなあと思います。ありがとうございます。

【高崎方子 (25回生)】

●この度は初めてオンラインセミナーに参加して、有意義な2時間を過ごすことが出来ました。

清水先生をはじめ五十嵐先生、中込様にお礼申し上げます。小学校2年生と4月から1年生になる孫のある私にとって「コロナ禍で考える学校」学校教育のあり方」はタイムリーなテーマで勉強になりました。学級の標準引き下げ、地方交付税の追加、正規教員の増員・待遇改善等、先ずは法改正・制度変更。安心・安全な学校で教師が子供たちの多様なニーズに対応でき、一人一人が生かされる少人数学級化に賛同致します。

【匿名希望 (22回生)】

●先日は懇話会に参加させていただきました。ありがとうございます。学生のころのように勉強させていただける機会がありました。また機会がありましたらよろしくお願いいたします。

【富田愛理】

●現在は、親が高学歴、高収入であるほど、子どもも高学歴、高収入になりやすい。ここに格差が生まれてくる。それをなくし、子どもの可能性をいかに育てていくかが課題である。新型コロナの影響の一斉休校開けに「分散登校」が行われ、この経験は、「少人数学級」の一人ひとりの子どもにも目が行き届きやすい、子どもたちの声を拾いやすいという良さを再認識させた。子どもの可能性を育てていくことから、コロナという危機がもたらしたチャンスは少人数学級の実現という形にしていけたらよいと思う。

【浦野敬子 (25回生)】

●お話を伺って益々「少人数学級を必ず実現したい」と思いました。すべての子どもが「今・ここに存在することの意味」を実感するためにも、少人数学級を実践している国の例などから学んで、これが

必須であることを広く示していきたいです。清水先生は東日本大震災の後、すぐに陸前高田に通って子どもたちのために必要な活動をなさっていたそうです。その活動を支えたのは、こどもたちは「問われること」つまり「語ること」そしてそれを「共有すること」を通して自律性を回復していくという考え方です。教育の基本とはこういうところにあるのではないのでしょうか。印象深いお話でした。

休校明けに分散登校を行って多くの人々が少人数学級の良さを実感することになったとありますが、このように困難な状況の中に新たな可能性を見ることがあります。清水先生は「危機の中から人は何を学ぶのか？」と言って学生と一緒に学んでいくとおっしゃいました。その姿勢から学生はきつと大切なことを学んでいるに違いありません。今日の懇話会も多くのことを学ばせていただいただけでなく、遠方の会員や学校現場で教育に携わっている会員の参加があったことも嬉しいことでした。質疑応答の先生のお話も味わい深く、「コロナだから」と言わないでできることをやっていこうという先生の生き方を見習いたいと思います。

【大森桃子 (26回生)】

●資料を頂いた時からとても期待していた懇話会。とはいえ、Zoomでの実施だどうなのか？と少し不安はあったが、全く問題ではなかった。むしろとても良かったし有難かった。内容については、教育格差が当面前になっっている昨今、コロナでの突然の一斉休校の問題点と唯一評価できた少人数対応。ここから教育格差を解決する方法としての少人数学級の推進という結論に至ったというお話は随所に感銘を受けた。ところで、教育格差をいち早く発見したのがイギリスの学者である事は、ブレグジットに繋がる格差社会を教育現場でいち早く顕在化した

という事なのか？と考えた。イギリスの格差社会を題材にしたエッセイ「僕はイエローでちよっとブルー」というベストセラーを読んでおり以前から興味を持っていた内容だったのだ。また学校の役割として、同時性、同じ場所でも同じ経験をすることの価値が重要であるという着眼点は目が覚める思いだった。斯様な学校の価値を最大化するための少人数学級の実践は多様性を容認し社会を運営する新しいキーワードだと感じた。小学校中学校大学と色々なカテゴリーでの教鞭をとっておいでの清水先生ならではのご経験に裏打ちされたご講義内容はとても刺激的だった。それを自宅で享受できるIT社会はとても有難く今後もZoomでの懇話会が定番になってもよいと感じた。

【中込知野 (37回生)】



回生委員会のお知らせ

新型コロナウイルス感染拡大のため回生委員会が開催できない状況が続いておりますが、皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。

4月の回生委員会も、残念ながらまだ感染拡大が懸念されまですので中止とさせて頂きます。次回回生委員会につきましては、感染状況により開催が決まりましたらお知らせ致します。皆様お体に充分気を付けてお過ごしください。

なお、5月に開催される教育学科の会総会はオンラインで行われることになっておりますので、教育学科の会の活動の様子等を総会への参加によってご理解頂ければ幸いです。

*回生委員を交代される方は新委員の「氏名、回生、住所、電話番号」を同封のがき表面の(近況や教育学科の会へのご意見等)の欄にご記入ください。

なお、交代の連絡はインターネットではなく、はがきにてお願い致します。

*ご不明な点がありましたら、回生委員長・萩野までご連絡ください。

萩野 (25回生)

TEL・FAX 0467(83)4054

会員の広場

ハガキ コーナー



◆85歳まで東京都特別非常勤職員として働き、健康で幸せな日を送りました。いつも感謝の日々でしたが、その後大病(病院で検査の結果みつけて下さりました)で大きな手術をし一気に年をとった感じがです。まだ杖は使用しておりませんが体力は非常に衰えました。こうして年をとっていくことを実感しております。現在は趣味を続けております。

(東京都 4回生)

◆年齢を重ねるごと、大学をなつかしく思います。寮にありましたので友達関係も多く、楽しんでおります。あの青春時代を色々経験し、また、勉強できたことで今の私があります。現役でがんばっております。

(神奈川県 13回生)

◆先日NHKの「知恵泉」で平塚らいてうさんの生き方をとりあげていました。大先輩、後輩の方のご活躍の姿をみるとうれしくなり、がんばらなくては励まされます。

(東京都 26回生)

◆教育学科が西生田にあるうちに是非一度、今年こそ最後のチャンスと思つて楽しみにしていた「懇話会」。まさかのコロナ禍により中止となり、永遠に西生田の森を訪れることは無理(?)の状況に落ち込んでおります。目白は昨年、卒業40周年で訪れることができましたので西生田の地にも訪問のチャンスを与えていただければ幸いです。

(信州・S 29回生)

◆退職して早いもので三年め。再任用フルタイムで担任(2年生)をしています。体力の限界を感じる毎日です。コロナで大きな行事がなくなり、なんとか若い人たちについている状態です。

(東京都 30回生)

◆誰もが経験したことの無い状況が長期にわたつて続いています。画面上で顔を見ることはできません。でも、やはり「会つて話す」ことの大切さをしみじみ思う今日この頃です。皆様どうぞお元気でお過ごしください。

(栃木県 33回生)

◆産休代替教員として調布市の小学校で学担をしています。昨年は仕事から離れ、七か月間世界の様々な場所を旅して周りました。教育学科が目白に移ると聞いて驚いています。

(東京都 53回生)

源了圓先生のこと

源了圓先生が去る9月10日に逝去されました。(享年100・心不全)

先生は京都大学(哲学)を卒業され、本学には昭和38年4月(昭和51年3月まで13年間勤められました。教育学科へ赴任された折は、「日本思想史」が御専門でした。

先生の御功績は、教育学科のカリキュラムを再編成されたことです。それは、三本の柱(教育学系・心理学系・人文学系)をたて夫々に必修と選択の科目を決められました。特に新しい分野の人文学系に力を注がれ、哲学・芸術・宗教等の科目を揃え、毎年その道の専門家を講師として委嘱しました。

おかげで三本の柱にそつて勉強した学生は広い視野と教養豊かな人間形成が成されたのではないのでしょうか。未だに先生の学恩が夫々の人生の歩みの中で、大きな糧となつて卒業生を支え続けているのを感じます。ここに心から先生のご冥福をお祈り致します。

教育学科元教授 遠藤明子

クロスワードパズル

二重枠の文字を組み合わせてできる3文字の言葉は？

1	2	3		4	
A					
			B		5
C					
			D		
E					

答え

--	--	--

タテのかぎ

- 「これを食べすぎるとニキビができる」というのは迷信。
- 糸があればできる昔ながらの遊び。
- 地球上の30%を占める。
- 必勝祈願。
- 赤飯やおにぎりにふりかけて。

ヨコのかぎ

- 「〇〇〇でいっばい」の名店
- 日本では駆け出しの者を意味する。「学者の〇〇〇」
- 古代からみられる美術の技法。
- 大きな群れをつくって泳ぐ海水魚。
- 学名「ニッポニア・ニッポン」

<ヒント>

四股名をもっています。

- ◆解答を同封のハガキインターネットからご応募ください。(5月16日締め切り) 正解者10名に図書カードを進呈します。(正解者多数の場合は抽選。)
- ◆前回の正解は<イカリ>でした。たくさんのご応募ありがとうございました。

【当選者】(敬称略・数字は回生)

前田 裕子(13) 内田 泰子(22) 中島 郁子(25) 陶山 葉子(28) 櫻井 慶子(29)
高田 志保(36) 滝嶋 佳子(37) 間野目 純子(53) 松田 真実(66) 野崎 瞳(70)

日本女子大学生涯学習センター「はじめてのZoom」オンライン講座ご案内 無料

本学「生涯学習センター」にて、2021年4月24日(土)「はじめてのZoom」(オンライン講座)を開講いたします。

自粛生活を余儀なくされ、人と集まり、話すことが難しくなった今こそ「Zoom」を使いオンライン上で集まるのはいかがでしょうか。お友だちとお茶をいただいたり、会議を開いたり、Zoomを使うことにより顔を合わせて一つの「場」を共有することができます。

本講座では、そのようなZoomのはじめの一步から、「会議への参加の仕方」「賛成の意志の表し方」「グループに分かれる方法」、さらには自分が主催者となり「会議を開く方法」などについて学びます。受講生二人につきトレーニングを積んだ学生一人がつかせていただきます。皆様のご質問やご興味のあることなどに寄り添いながら丁寧に進めて参ります。

Zoomを使い、さまざまなつながりの輪を、一緒に広げることができましたら嬉しく存じます。

【井上ゼミ3年 日置巴菜】

講座名 「はじめてのZoom」オンライン講座(定員11名)

開催者 人間社会学部教育学科井上ゼミ4年生 3年生

日程 2021年4月24日(土) 13:00~14:30

内容 「人とつながりたい思いのある方」、「つながって支えたい方」、「一歩が踏み出せないでいる方」、オンラインに「苦手意識のある方」、「興味関心のある方」を対象に、開講いたします。何度も操作し、慣れることが重要ですので、予習・復習用に「やさしいマニュアル一覧」(Zoom, Microsoft Teams, PowerPoint)を作成して以下に掲載いたしました。

文献 「パンデミック下のゼミ教育2020 —『置き去りにしない』・『苦手を活かす』マニュアルプロジェクト—」『教育フォーラム』67号 金子書房 2021年3月25日刊

右記のQRコードより「生涯学習センター」のトップページにつながります。デジタル版のご案内は三月下旬からです。お申し込みはオンライン、お葉書からとなっております。



編集後記

★現在住んでいるイギリスも、ロックダウンにより、5歳から通う小学校以上は毎日オンライン授業が行われています。特に低学年のうちは子供の横にずっとついて、毎日の課題をサポートする保護者側の大変さもよく耳にしますが、ここにも家庭の格差が大きく生じていると思います。教育は世界共通の課題です。また、貴重な大学生活に不安を抱える1年生を自主的にサポートする学生委員さんの活動は素晴らしいです。教育学科ならではの温かさを感じました。

佐野加奈子(59回生)

★先日友人から日本女子大マスクをいただきました。販売しているんですね。創立120周年の年に、教育学科が目白に帰還し、大河ドラマで渋沢栄一第3代校長。なんかどきどきワクワクの日本女子大の年になりそうな予感です。

星野ひろみ(37回生)

★10年前に教育学科の会として「桃・柿育英会」の育英資金に協力しようと思ったとき、息の長い支援という趣旨に賛同したものでしたが、経ってみればあつという間でした。困難を乗り越えて大きく成長してくれているであろう子ども達が、これからも幸せにと願うばかりです。

石井美奈子(38回生 会報編集部長)